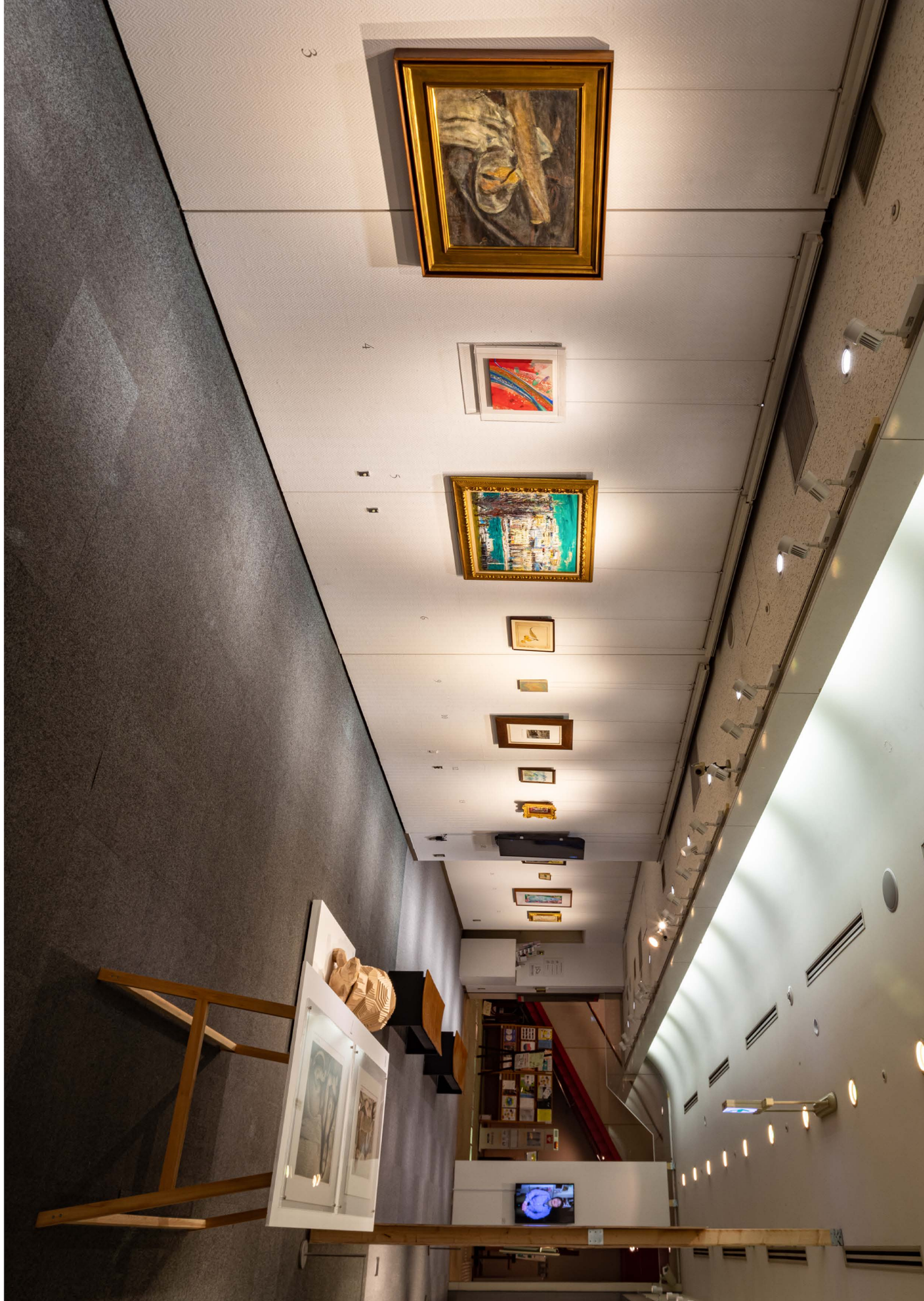
ごあいさつ

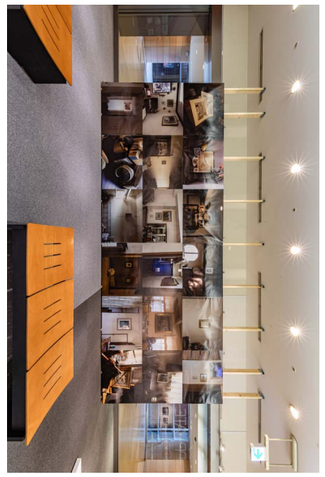
ときおり、美術館のキャプションで目にする「個人蔵」という文字。
アーティストの藤井龍は、この作品の所有先を示す言葉から着想を得て、
『Private Collection』と題したプロジェクトを展開してきました。
個人宅に飾られている作品に注目し、その在りようを写真に収めていく本作は、
これまで愛知県と岡山県内で取材して展覧会で発表しています。
—
この度、生活工房で開催する「プライベート・コレクション展」では、
世田谷区内の個人宅18軒で飾られている約20点の美術作品を紹介します。
今回のために撮影した写真だけでなく、
お借りした作品と所有者へのインタビューもご覧いただけます。
所有者が語る作品の由来は、どれもユニークなエピソードばかりです。
こうした暮らしのなかにある「美術」に目を向けてみると、
ふだん意識することのない「生活」の輪郭も見えてくるかもしれません。
—
収蔵庫を持たない生活工房が、個人宅から作品をお借りして開催する展覧会。
生活とともにあるプライベートな美術作品の数々を、どうぞお愉しみください。

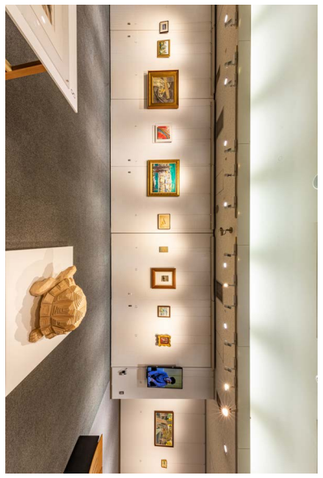
公益財団法人せたがや文化財団　生活工房

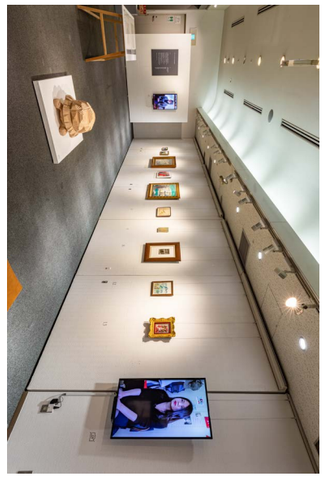
謝辞

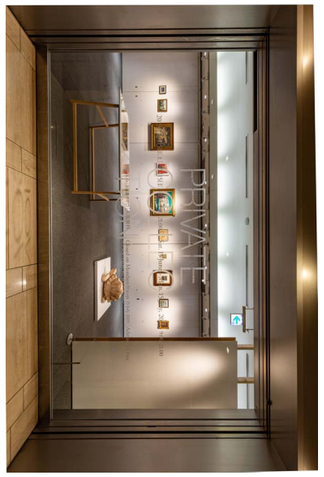
本展の開催にあたり、ご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。
（出品協力者、敬称略、順不同）
—
林田カヨ子
植山茂明
長竹直哉
鈴木マキコ
加藤英一郎
舟橋光子
山口和良
髙島修
細野千恵子
大黒啓三
筑木直子
板坂留五
宇佐美貴世
藤井理花
山下葉子
上村英司
齋藤千紘
他1名

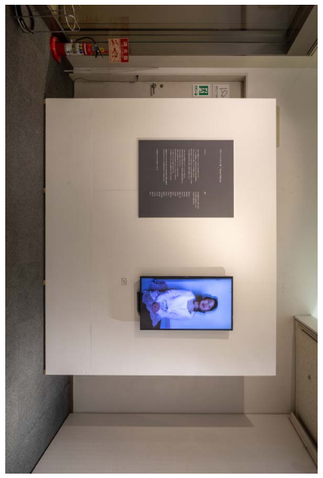


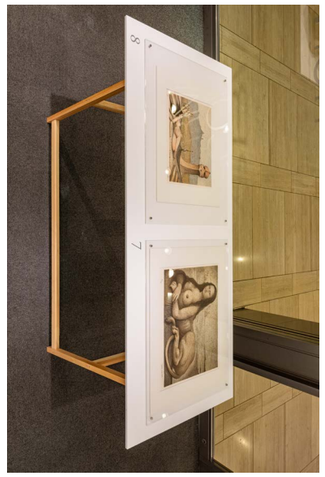


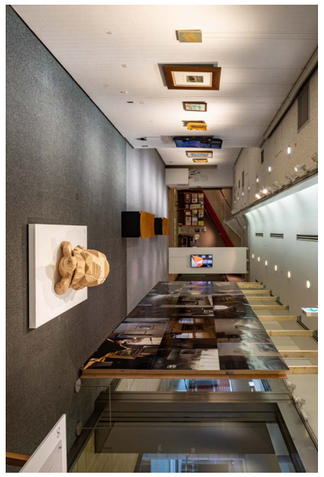


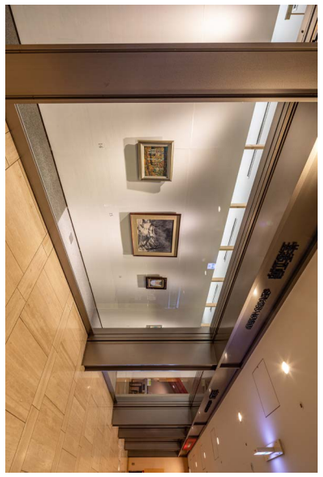












展覧会場写真

上 | 不明 | 小石サダヲ | 制作年不明 ／ 下 | 深海の夢 | 小石サダヲ | 制作年不明

プライベート・コレクション | Private Collection A

無題（フランスパンと洋梨）｜馬越舛太郎｜制作年不明

千歳台っていう、リサイクルの、あれはなんですかね。リサイクルをやっている世田谷の施設があるんですね。そこに掲示板がありまして、譲りたい、譲ってほしいっていうコーナーがあるんです。そこに自由に、自分が誰かに、なんか3万円以内だったら値段も付けていいというようなコーナーがあるんですね。そこに貼り出されていたんですね。馬越圭さんが、どなたか引き取ってくれないかというようなことで、チラシを作って、そこに…、そこは記入するんですね。チラシっていうよりも、写真を添付するっていうか、わかりやすくしたりはするんですけども、そういう写真とともに貼られていたのを見て、ちょっと興味がありまして、ちょっとお電話したんですね。

—

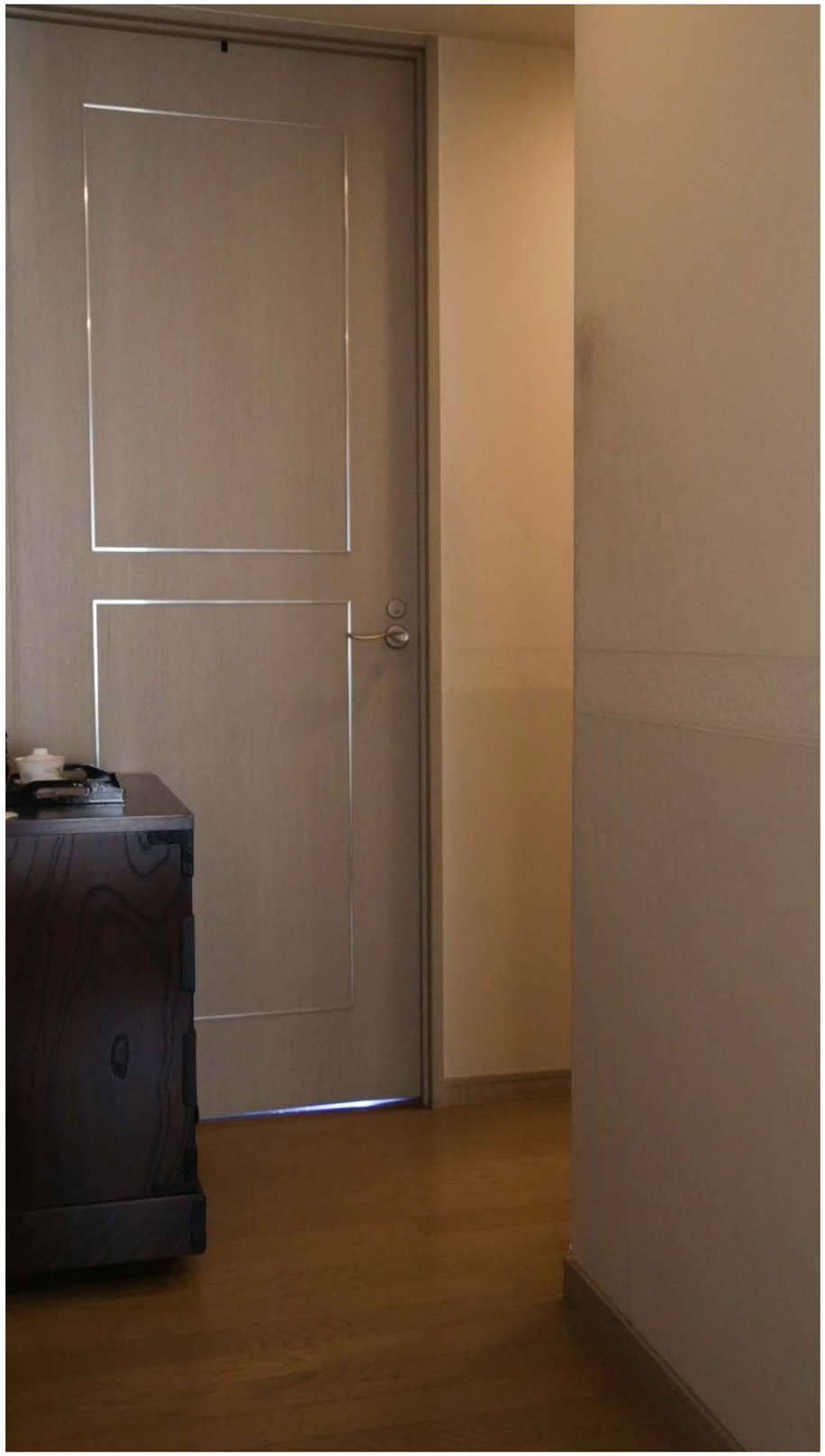
そして家が近いっていうことがありまして、それですぐに持参してくださったんです。最初じゃないんですけど、何回目かに舛太郎さんっていうおじいさまの絵をお持ちになったんですね。それがこのパンの絵と、何ていうか、家が描いてある絵なんですけども、その舛太郎さんという方は、知る人ぞ知る、ちょっと有名というか、方だったんですね。その息子さんで、純一郎さんという方が亡くなられて、目白にあったアトリエを整理するっていうので、作品をたくさんお持ちだったんですね。それも一緒に持ってきてくださって。

—

そうですね、フランスパンで、あの時代ではちょっとモダンな題材だと思うんですよね。洋梨とフランスパンですね。それでレトロな感じが、やっぱりこの部屋の雰囲気に合っているんだなっていうのは感じますね。こちらの、額は重いんですけども、落ち着くような感じがするんですけども。

—

ええ、重いんですね。額はすごく重くて、それで本棚の上に、最初は、ああ、本棚だな。こちらの本棚ですけども、上に置いていたんですけども。ちょっとこう、もしかしてひっくり返るんじゃないかなと思いまして、ちょっと下に下ろしたほうが安全かなと思ったんですね。なんかこの家も、壁っていうよりもボードが貼ってあるんですね。それで掛けても耐えられないというか、それぐらい、ちょっと重いので、今はちょっとそういうふうにしております。



GLOBE563｜武田州左｜2004年

まずお客さんは、玄関を開けたときに、あ、絵が飾ってあるっておっしゃるし、あと、うちで時々、おひな茶会というか、茶会をしたときに、ちょっと別の所に置き方を工夫して置いたり、こんなふうに、美術品って自分が買うものだと思ってなかったけれど、家の中にあるのっていいねって言われることはあります。

—

ある日、いつものように画廊で個展をやっているということで行きまして、それで見ていたときに、とてもキラキラと光ってきれいだったんです。ちょうど上に飾られていることもあって。ちょうど虹とかオーロラを一緒に見るような形で。それであんまりきれいだったので、お洋服や宝石を買うぐらいの値段で大丈夫かなと思って、思い切ってそれを買い求めたんですね。

—

買い求めてしばらくして、偶然なんですが、ちょっと私に病気が見つかって、入院して手術というときに、私はこれを持って入院しようと思ったんです。それで、お部屋は個室で毎日毎日、キラキラ光る絵を見て。で、必ず治って、これをまた太陽の光の下で見たいと。そのときは、作家さんには何も連絡はしなかったんですけども、退院するときに、あの絵を毎日見て元気をもらいましたっていうことで、ご連絡したんですね。ですから退院してきて、今そこに、玄関に飾って、家に帰ってきたときに玄関を開けると、パッと目に入ってくれる。そういう、私にとって大切な絵です。

—

お電話口でもとてもびっくりしていましたけれども、後からお手紙をいただいたときに、それこそが自分たちにとっての使命だったんじゃないかっていうことに気付きましたと。ですから、私は普段からこの人の絵が好きで、自分は今買えないけれど、美しいものって必ず人を励ましますよねって、そういう話はしていたんです。でも、自分がこれほどまでに励まされるとは、ちょっと思っていなかったです。

—

抽象画ですから、意味は深くは…、それは受け取る方がどうぞ、受け取ってくださいってご本人は言ってはいらっしゃいます。ただ私としてはこの作品を見ていると、私は絵を見ているんですけれども、武田州左さんの心の動きを見ているようなときがあって。あ、今は赤が好きなんだなとか、そんなふうなダイナミックな流れを描きたいんだなとか。一番最近の例は、空から見た、ちょうど飛行機の窓から見た風景にインスパイアされて描きましたっていったときに、ああ、この白がそうなんだとか。そういうふうに勝手に思い込んではいるんですけれども、私は紛れもなく、絵の中で武田さんの心の動きを見て、そこに描かれたものがあんまりにもきれいなので、美しいものっていうのはこんなふうに人を元気にするんだって、そういう感じで見ています。

TOSHIBA

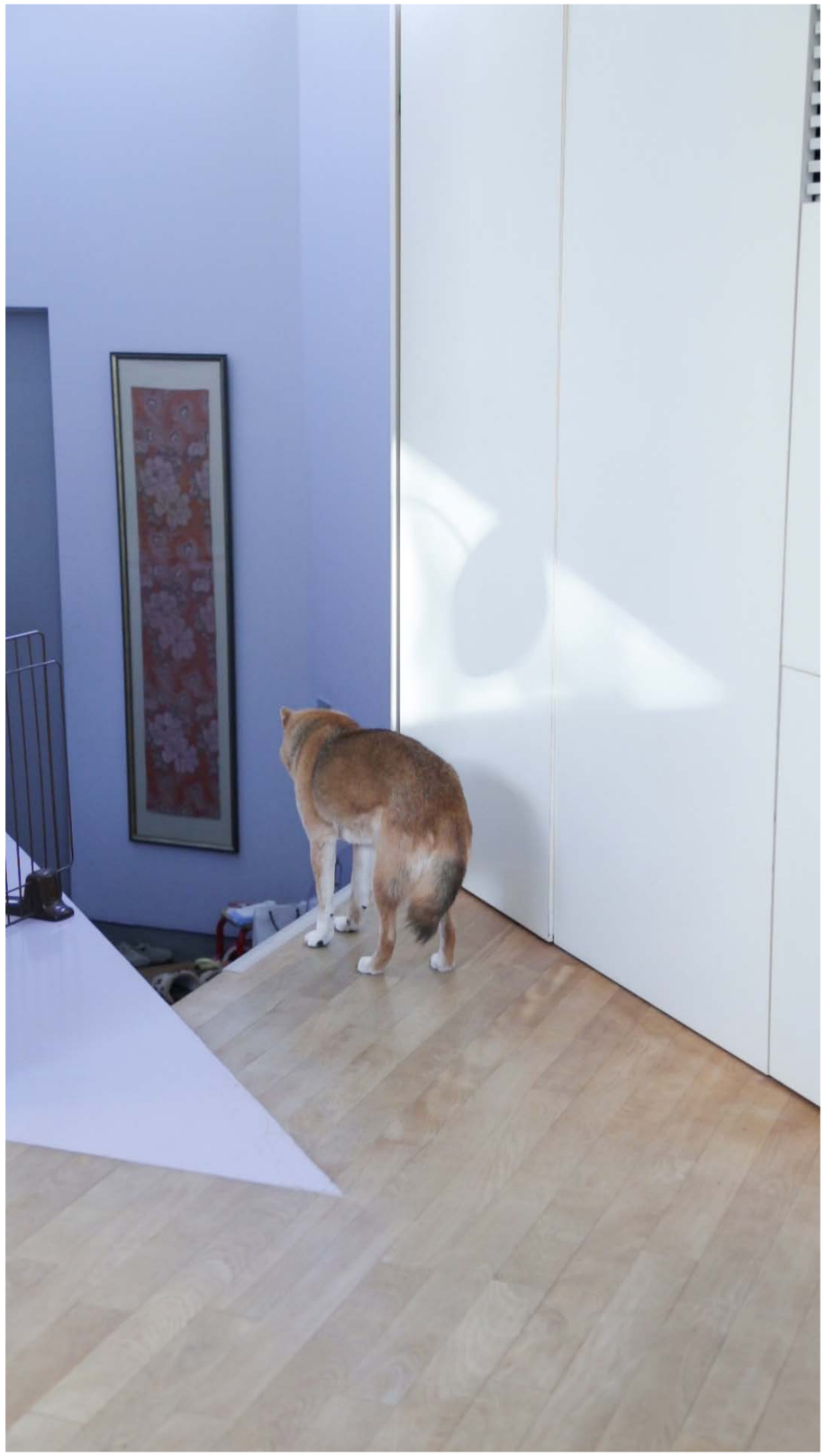
セーヌ川｜上村一朗｜1985年頃

そうですね。うちの父親は、中学校の教師をしながら画家をしていまして。本当は画家になりたかったんでしょうけど、画家だけでは生計が立てられない。子どもが3人いましたので、その生活費を養うために教師をしていたんだと思います。で、好きな画家をしながら、アトリエをつくって、自分の思いどおりの絵を描いていたという感じになります。

—

海外の、これ、多分フランスに行ったときの風景画なんですけども、初めて父親が、その当時ですね。もう40年ぐらい前、大金をはたいて海外に行って、嬉しそうに描いていたっていう。子ども心にそういうのも思いつつ、やっぱり色使いですね、と構図が非常に気に入ってしまったということですね。

出来上がった瞬間に私が見て、すぐそれをくださいと。くださいというか、私が管理しましょうということで、持ち出して、自分のものにして、今まで門外不出になっているという状況になります。ですから、この絵は私にとっては、もう40年以上、一緒に飾っている絵になります。もう亡くなる間際は、家にある絵をどうするんだと聞くと、もう捨ててくれということを言われたぐらいなので、本当に自分で楽しんでいたのかなというふうには思いましたね。ただ身内としては、やっぱり一生懸命描いた絵をそんなに捨てられないので、里子に出すような感じで、知り合いの方に引き取ってもらったりしていました。



枇杷｜植山五郎｜1912年頃

学校で描いていますので、ちょうどこういうところに、必ず成績が、先生のね、赤い字で書いてある。いずれも甲乙丙の、悪くても甲。中には特甲とか、そういった評価もいただいているんで、やっぱり学校でも、おそらく絵がうまい子で評価されていたのかなというふうな気がしております。

—

今にして思えば、親父の絵の血筋というんでしょうかね。表立って話し合ったことはないんですけども、私もやっぱり絵が、小さいときから好きで。ある意味では得意でもあったし。それで絵の学校にも行きたいなって考えたこともあったり。それから、うんと時代はまた飛ぶんですけども、結局会社を辞めた後、退職してからは、もう一回学生時代に描いた絵を描き直してみようかなということで、今も絵を描いていまして。世田谷区のあるアマチュアの団体で、人物画を月2回描いて、その会のまとめ役なんかも、今やらせていただいているという状況ですね。ということで、できれば親父が生きているときに、この絵を見ながら何か話をしたかったなというのは、ちょっと、今になってみると悔いが残ることではありますけども。草葉の陰では、今こうやって飾ってもらっている絵があるんでね、喜んでいるんじゃないかなとは思っておりますけども。

—

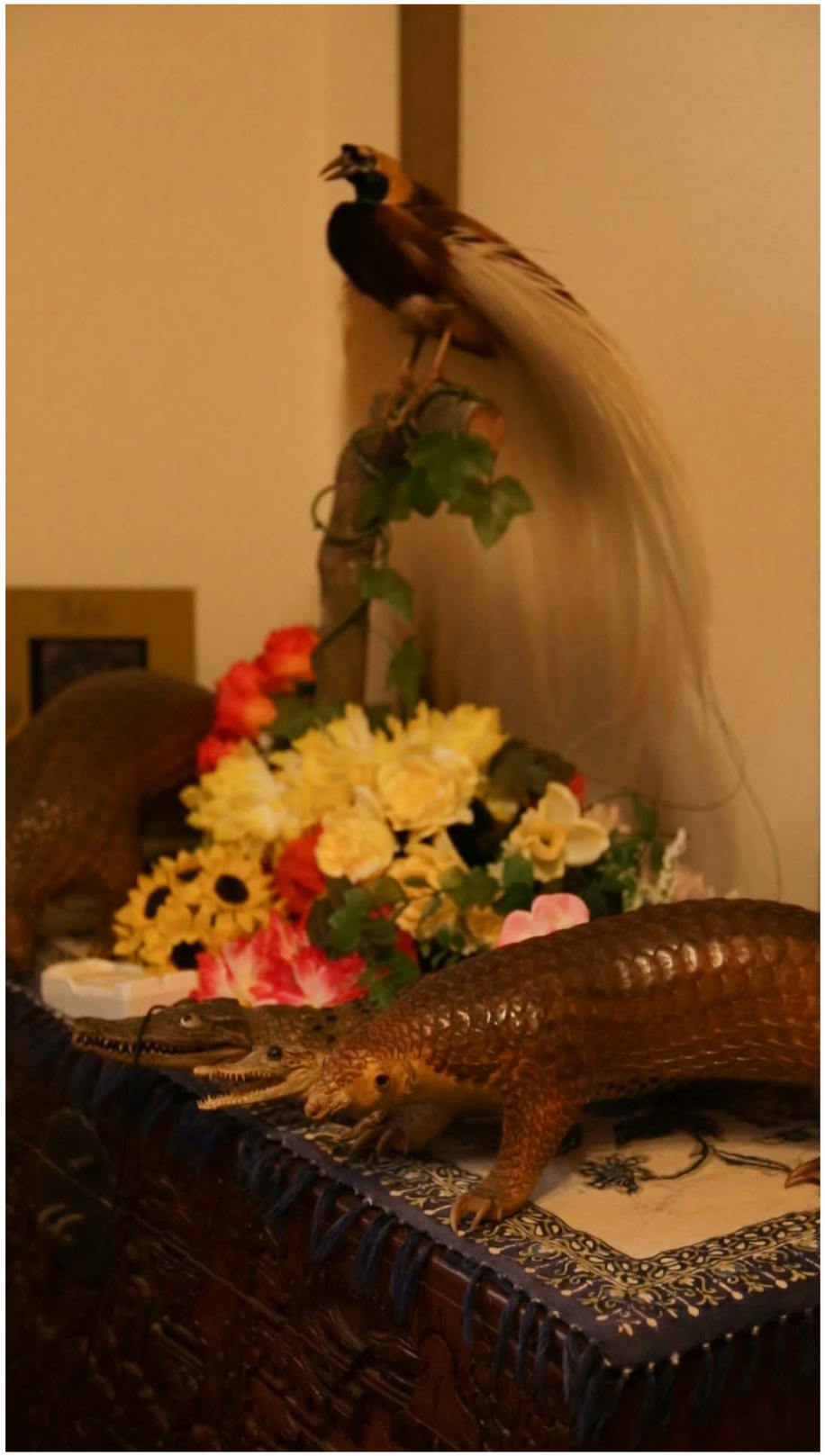
私が一回、絵の学校を受け直したいというようなことを家の中でも言ったときに、それは、親としては何も言わなかったんですけど、そのとき何を思っていたのかなということなんかも、もし。おそらく大反対したんだろうと思いますけども。アマチュアでも絵が描けるよということを言ったんだろうと思いますし、結果的にはそういう形で、私も絵心は、なんといいましょうかね、一時は、封印というほどじゃないけど、まあちょっと、やめましたけどね。ただ幸い、入った会社でも、入るときにもかなりアピールもしましたけども、絵と少しでも近いような仕事ということで、宣伝の分野だとかデザインの分野ということで、社内アピールもして、ほとんどそれの、近いところで働かせてもらったんで、これもある意味ではそういう流れだったのかなという気がしますね。

—

基本的に、私が物心ついてから、19でおやじを亡くすまで見ていた親父というのは、とにかく真面目なんですよね。勤勉、実直、几帳面、そういう親父だったんで、あまり道楽とか遊ぶということはしていなかった。時代が時代だったかもしれませんけどね。だからその実直さとか、それから、几帳面さというのは、絵に出ているんだなという気はしますね。

—

今から思うと、もうちょっと自分の連れ合い、亡くなったうちの母ですけど、母とか、それから家族と遊ぶということがもうちょっとやれれば、もっと、きっと生活は楽しかっただろうなと思うんだけども、とにかく真面目で。仕事ばっかりではなかったですけどね。それこそ時間があったらば、絵をなんで描かなかったのかなっていうね。それで絵を、また絵仲間なんかもつくれば、もっと人生は充実しただろうなと思いますけどね。そんなところですかね。



上｜ガウディへのオマージュ｜ジョセップ・スビラックス｜1995-7年頃
下｜ガウディへのオマージュ｜ジョセップ・スビラックス｜1995-7年頃

私、小さいときから、大学を卒業して、もうずっと絵画、彫刻、非常に興味がありまして。私は商社マンだったもんで、いろんな、外国へ行くと、必ずその国の美術館とか博物館とか行って、いろんな絵を見る機会がありました。それから、よくパリなんかも行きましたもんで、ルーヴル美術館へ日本からのお客さんを案内して、古今東西の名画を見るチャンスがありまして。折あらば、機会あらば、こういう仕事もやってみたいなと思いまして、ずっと心の中に温めていたんですが、最初にサルバドール・ダリの、リトグラフの、日本の販売権を取りまして、その宣伝でいろんな画商から、美術館から、いろんな業者に会う機会がありまして、ますますこういう仕事ができたらなと思ってですね、ますますその分野にのめり込んだわけなんですが。時を同じくして、ガウディという名前、日本で非常に有名で、日本人も今、年間70万人ほど、ガウディを見に行く観光客がいるんですね。以前はフラメンコ。スペインといえばフラメンコというお客さんだったのが、今はフラメンコじゃなくて、ガウディを見に行くという人が70万人もいるということが分かりまして、このガウディを、例えばエルメスだ、ディオールだというようなブランド化として取り扱いができないものだろうかということで、スペインの文化庁に所属するガウディ協会の会長に、そういうアイデアを出しましたところ、それは面白いなと、じゃあ君、やってみるか、ということになりまして。

—

今日までいろんな製品を作って販売して、そこそこの実績ができたんですが、その流れの中で、たびたびスペイン、特にサグラダ・ファミリアに出入りしているときに、西側の門の彫刻を、1人で完成したホセ・マリア・スビラックスという彫刻家に会いまして、親しくなったんですが、私に関するいろんな情報を得ていたんでしょうね。じゃあ君に任せるから、私が描いた個人的な絵があるんだと。こういうもの、日本人は好きかどうか、今初めて日本人に見せるんだけど、君にあげるから日本でちょっと紹介してくれないかと。もしこれがビジネスとして成り立つなら、リトグラフにして量販することはできるということで、この絵をいただいたのが、ちょうど20年前ぐらいになりますかね。

—

実際に描いたのは20年前ですけど、芸術の世界で20年前というのは、現代なんですよね。現代そのものなんですね。その古さというより、彼の、サグラダ・ファミリアで頼まれた、彫刻の依頼の意味も含めてですね、これぐらいのことは当然やっているだろうなと。また、他にも趣味でやっていることがあるんじゃないかということも思いますね。例えばレオナール・フジタにしたっていろんなことをやっていますもんね。ただ、それをそのとき、同時に発表していないだけであってね。時代が変わったら、実はこういうものもやっていたんだというものは、どの作家にしても結構出てくるんじゃないでしょうかね。非常に、いや、これは傑作だなと。普通の人が見るより、そういうバックグラウンド、多少とも知っていますもんでね。いろんなことを、これで連想しますから、非常に興味深い絵だと思います。

Rinnai

閉じ込めておけるもの｜奥誠之｜2018年

奥くんっていう、奥誠之くんの作品で、去年の修了展、彼が油絵の修士２年を修了するときで、ちょうど私も修了するっていうときの展覧会で出会ったもので、この他にもその展示、多分展示室自体が作品みたいな感じで、割と広い部屋に真っ白い、なんかアトリエに何十点、20点近くの作品が机に置かれたり、壁に掛けられたり、次の日に行くとちょっと配置が換わっていたりみたいな、なんかあれぐらいの小作品がいっぱい並んでいるっていう感じの展示で、なんかまず、あれ1個の話というよりかは、展覧会、展示室自体が、1個の空気感があって、そこで出会ったという感じですかね。その一部分だったっていう感じ。

—

なんかちょうど、私も春から新しい生活になるし、部屋になにか、いつもと違うものを置きたいみたいに思っていて、そういう気持ちもあったので、なにか選べるかなっていう気持ちでは見始めて。そのときに気になった作品が２、３点あって、それでメールをしたときに、幾つか、その思っていた3つを言ったら、これ、今、飾ってある作品が、まだもらい手が見つかっていないというか、あって、じゃあそれにしますという感じで。

—

なんかこれで面白かったのは、3つとも選んだのが割と違うかったと思うんですけど。なんかあれは何を描いているか、わかっちゃえば人の顔って分かるけど、なんかぼんやりしていて、人の顔なんだけど、なんか圧がないし、部屋にあっても大丈夫だなっていうか。なんか人の顔とかあると、ちょっと強いけど、あの色みたいな、形みたいな、でも人の顔みたいな感じだったら、なんかすごいいいし、優しいなと思って選んだ感じですね。

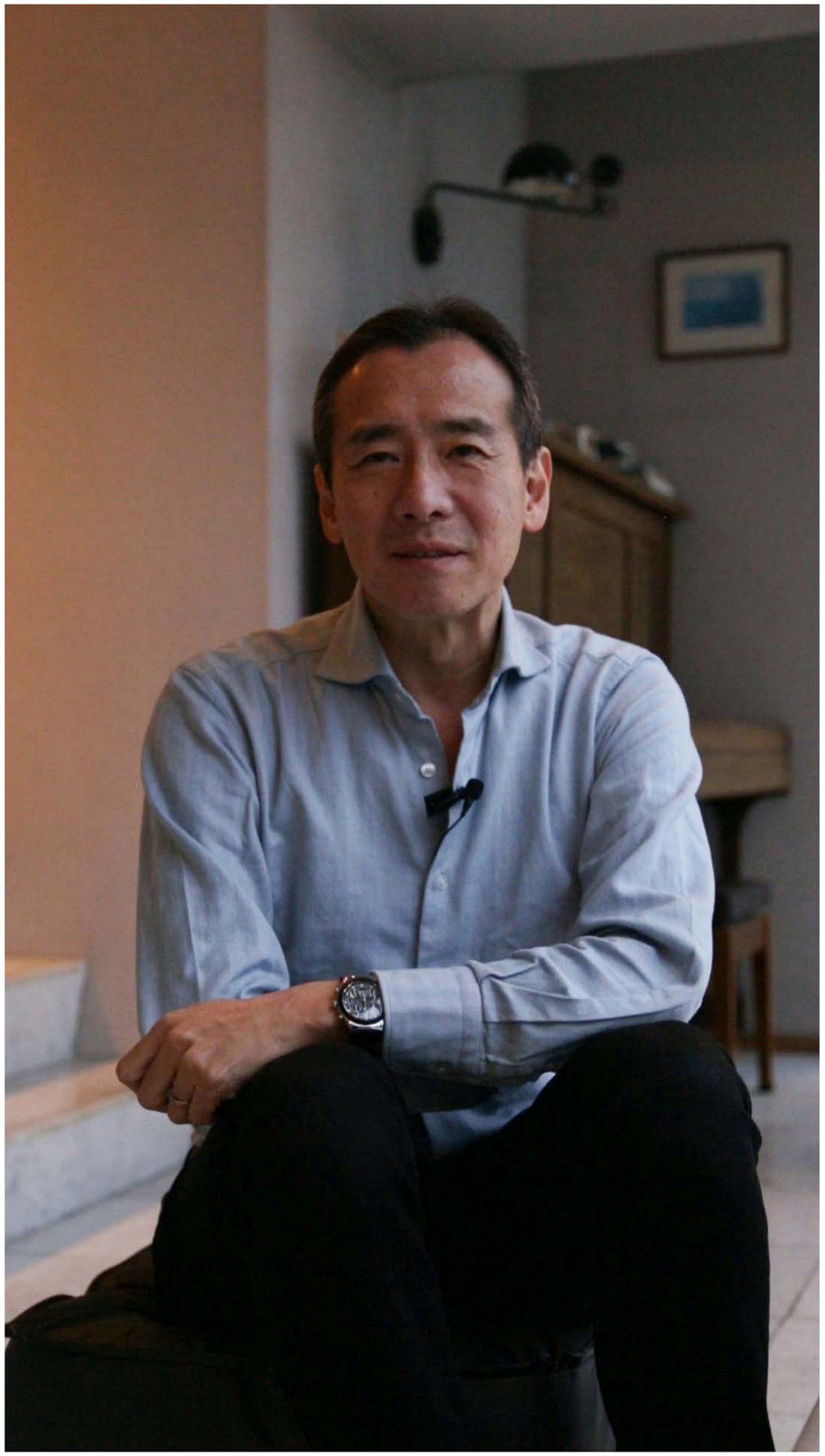
—

何人か知り合いで、なんか卒展とか、友達の作品を買ったりみたいな話が、なんかチラチラとあったんで、あ、そういうことってしていいんだと思って、で、初めてやってみて。その後は、作品を買ったりとかっていうことは、まだ実際にできていない気がするんですけど。ものを見るときとかに、家にあったらどうかなみたいなことは、割と考えるようになった、ですね。

—

ものを飾ることみたいなこと、なんか家の中にあることは、意味のないものがある、意味のないものというか機能のないものが、特に賃貸とかだと自分の必要なものしか持ってこないから、基本的には必要な椅子と本と机とみたいなのしかないけど、ああいう意味のないものみたいなものがあると、なんか急に自分の部屋みたいな感じがしてくるというか、それが面白いなって思っていて。拾った石ころとかも同じ感じで置けるみたいな。まあ、割とゆるくなっていいなと思います。

NESPRESSO
inissia



上 | カシオペイアーモモー | 大竹口瞳 | 2019年

下 | My cousin, Bouboutte, Loulou, Bob and Zissou. | ジャック=アンリ・ラルティーグ | 撮影1903年

これ、カメは、今年卒業した、美術大学の女の子の作品なんですけれども、作品名はカシオペイアというんだそうなんです。これは童話の、ミヒャエル・エンデという人の『モモ』という作品、日本でも随分人気のある作品かと。私も昔読んだことがありますし。内容まではちょっと、すぐ思い浮かばないので、また読み返さなきゃいけませんけれども。ストーリーは時間を盗まれちゃう、そういうお話なんですね。

—

その中にカメが現れてきて、そこからのイメージの発想だそうなんですけれども、今まで彫刻作品って、見ることはあまりなかったんですけれども、今回これ、大きさもボリュームがあったりもしますけれども、見るとやっぱり迫力というか、作り上げていく気持ちのすごさというのが、もう本当に伝わる作品で。どうしてももっとゆっくり見てみたい、見てみたいと思って、ちょっと手元にしばらく置かせてねということで、わが家に転がり込んできたカメなんですけれども。

—

別にどこでも良かったというと変なんですけども、カメだからやっぱり毎日、どこか歩くから、置き場所を変えようかなと思ったんです。そんなこともあって、だけどちょっと、実際畳の上に大きなカメがいたら、こんなふうに見えるのかなと思うけど、なんかちょっと、姿としては結構いいかなと思って、しばらく、数日はここにいてもらおうかなと思っていたんですけれども。

—

この、作家というのはちょっとあれかな。アマチュアのラルティーグという人なんですけども、この人はなんかずっと、もう生涯にわたって日記を書き続けてきたようでして。だから、おそらく彼にとっては、文字に書くことでなくて、カメラを手に入れることで毎日を記録する意味もあったのかもしれません。毎日、楽しかったこととか、面白かったこととか、そういうものの記録だったのかもしれませんね。だけど本当に、優しいまなざしというんでしょうかね。すごく自然に、家族、例えば兄弟だとか、親戚だとかに接している姿が、写真に現れているようで、なんかうらやましいなと思います。それに今と比べて、これはもう120年も前のフランスの風景でしょうから、もっと時間がゆっくり流れている、そういうスピードのなんか…、スピードというか、ゆっくりした時の流れも感じられるのかなと思って見ています。

—

多分写真については、別に誰に見せようと思って撮ったものじゃないと思いますから、そういう意味じゃ作品じゃないかもしれませんよね。なんか自分に問い掛けるじゃないけど、普通に自分に、自分のためにっていう、そういう気負いのなさも…、が、この写真の中に見えるかなという気もします。まず、撮るほうも撮られるほうも、知らない人同士じゃなくて、兄弟なのか、親戚なのかだったりすると、気持ちが楽ですよね。別に特別な表情もしなくていいし、普通の気持ち。今、私がちょっと緊張している感じとは全然違うものだと思うんですけどね。

—

やっぱりなんか、1つだけよりかは、2つとかあったりすると、ちょっと作品も語り合っているような、また別の、なんか醸し出すものがあるのかなという気はしましたね。1つだけですと、なんかちょっとこう、何でしょうね。あらたまって飾られているのかなと思うけど。それが、ましてこんな抽象じゃなくて、動物のモチーフだったりすると、なんか語り合っているようなほほ笑ましさもあるかなと思います。

Langstroth
LANGSTROTH'S HIVE AND THE HONEY-BEE
THIS IS
技法以前

春のおとずれ | 佐久間宗 | 制作年不明

この絵はうちの祖父が描いた絵なんですけど、この絵と出会ったのには、結構長いストーリーがありまして。そもそも祖父は、うちの母が2、3歳のときに、もともと画家を目指していたらしいんですけど、やっぱり自分の画家の夢を追い続けたいということで、家庭よりも自分の夢を追い掛けて、いなくなったらしいんですね。そのいなくなってから、もうずっと、だから母が3年で、3歳のときにいなくなって、そこからもう何十年もたって、実は祖父が絵画教室をやっていたらしくて、そのお弟子さんから電話がかかってきて、女性から、母に。もう余命何カ月かで、ちょっとあれなので会いに来てあげてくださいみたいなので、母が聞いて、すごいびっくりして。

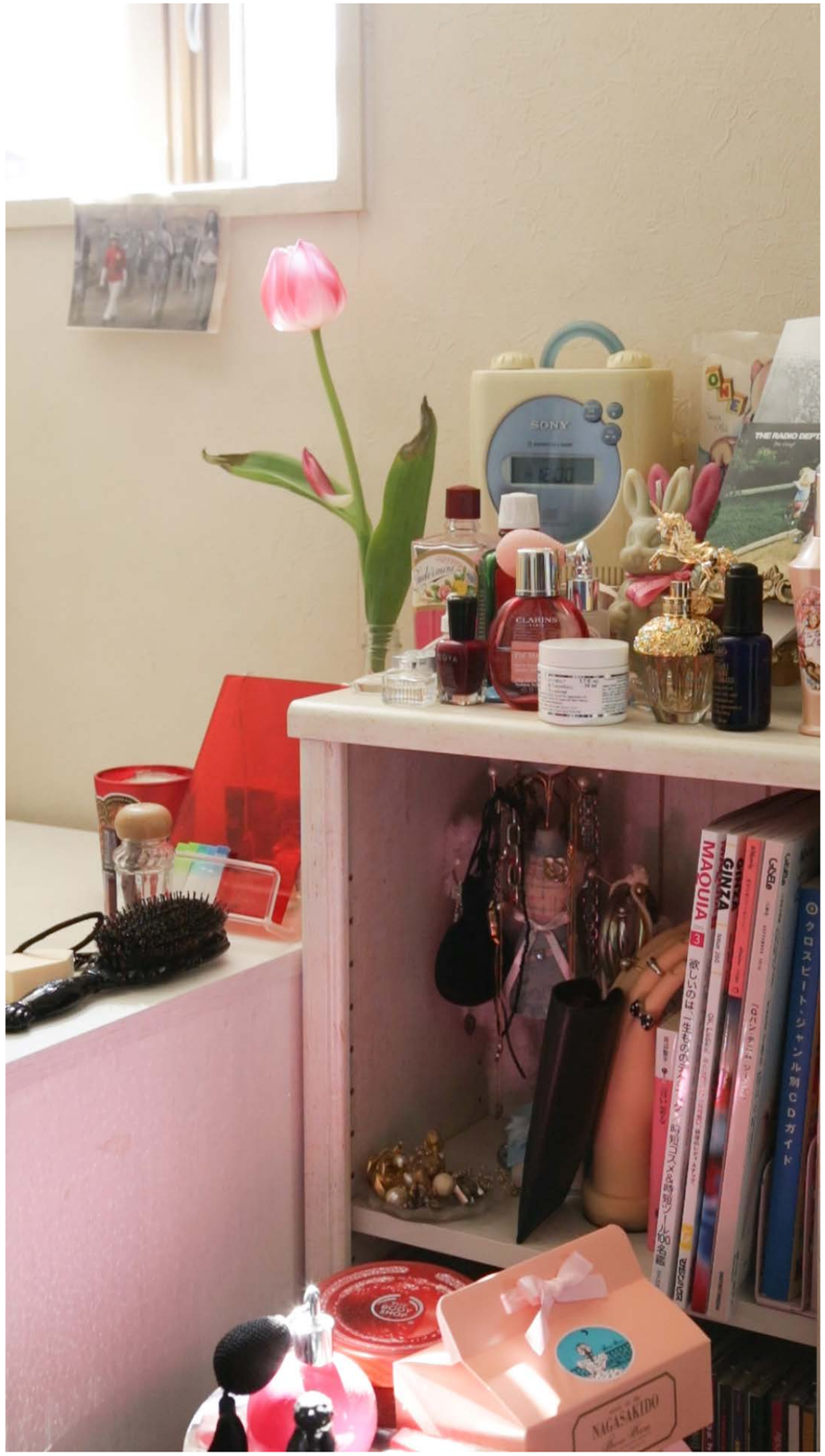
—

で、いなくなった後、三鷹に住んでいたらしくて。それで三鷹で絵画教室を開いていて、そのお弟子さんから電話が来て。でも母は住所だけを聞いて、祖父に会いに行ったときに、家に行く途中で老人が向こうから来て、自転車に乗って、その老人が、うちの母親はケイコっていうんですけど、「ケイコちゃんかい」と言って、それで見たら自分の父親で。だから何十年ぶりかの再会。

それから何カ月かして祖父は亡くなったんですけど、その亡くなった後に、祖父の家、僕は祖父の家は、もう病室しか行ったことがないんですけど、祖父の家にいっぱい作品が飾られていて。なんか風景画家だったらしくて、いろんなお弟子さんがいっぱいいて、日本最後の風景画家だとか言ってくださる方もいて。で、そういう有志を募って、銀座のギャラリーで個展を、最後の個展をやるということで。で、一応なんか、その個展をやる前に、親族のかたがた、どうぞ、好きな絵を持っていってくださいということで。僕、3人兄弟がいるんですけど、姉と弟と僕と、母も含めて選んで、で、この絵を僕は選んで、今飾っています。

—

年末かなんかに、そこにもともと、今ある場所に、本がバーって、積読でこうなっていたのを片したから、ここが空いたんですね。それを妻が発見して、ここが、トイレに飾っておくよりも、居間に来たほうがいいんじゃないかということで飾ったのかな。そんな感じです。普段は、でも、ほとんど気にしていない。足元にあって気にしていないですね。なんかたまに、パッてこう、なんかパッて、なんかあったときに見て、癒やされるみたいな。


SONY
CLARINS
GINZA
MAQUIA
MIKASAKIDO

ボンネットの人形 | 小松崎邦雄 | 制作年不明

私もちっちゃいときから、結構美術みたいなもの、好きだったので、なんか祖父と共通するものを、すごく私は持っていて。他にもお人形とかがたくさんあるので、そういうの、好きだ好きだと言ってたら、ああ、こういう絵みたいなものが好きなのっていうふうになって、飾ってくれたんだと思います。

—

かわいいと思うし、きれいだと思うんですけど、ちっちゃいときは本当、正直全然価値がわかってなくて。小学校2年生のときに飾ったときは。逆になんか、自分が新しく部屋を持てるのに、なんで置くの?、ぐらいの気持ちだったんですけど、でももっと大人になって、今になってみたら、結局こういう絵とかも好きになったし、美術も好きになったので、かたどってくれたのかなと思うし、今のほうが多分好きだなとは思います。

—

一言で言えば、天才なんですけど、表裏一体なので、すごくこう、変な人でした。私、すごく祖父のことが好きだったので、思い出はたくさんあるんですけど。

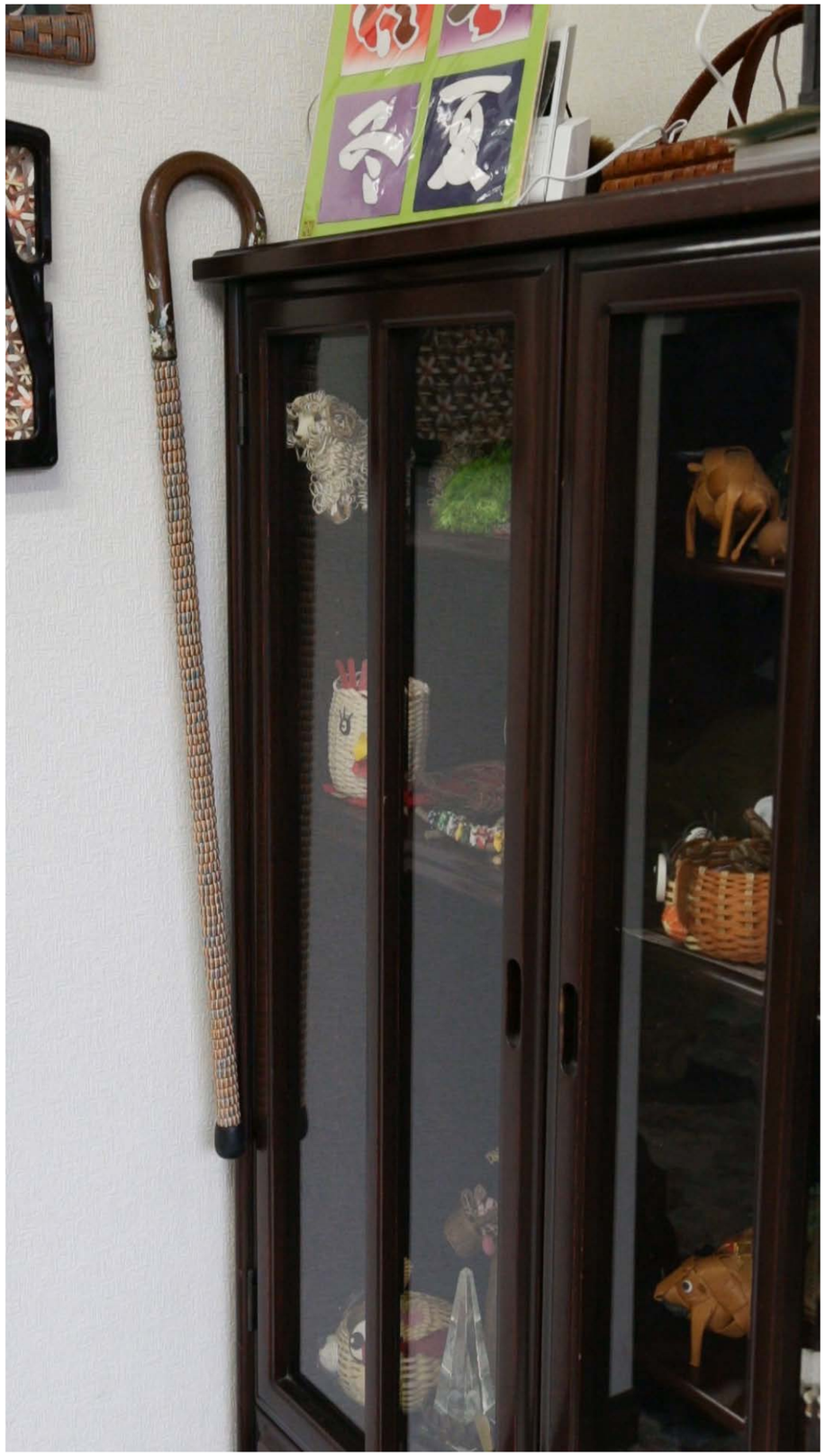
—

絵とか芸術が好きな人って、高等な趣味っていう感じで、普通、品があると思うんですけど、私の祖父は、もう品が全くなくて。全く品がないのに、ものすごい芸術性を持ってて、自分で絵とかも描いていたんですけど、それもすごいうまかったし、ゼロと1みたいなところを持っている人で、そういうところはすごく好きだったし、最終的にはこういうふうに、私に絵をたくさんくれたり、人形を残してくれたので、私のことを大切にしてくれていたのかなとは思います。

—

なんだろう、関わらされてはいたというか、なんといったらいいのかな。なんかお稽古ごと、お習字とかなんでも、いろいろやっていたんですけど、そういうのはすごい応援してくれていたし、学校でやっている範囲なんですけど、工芸でなんか作って送ったりとかしたら、すごく褒めてくれたりとか、いいじゃないって言ってくれたりとか。そこにもちょっとあるんですけど、画集を定期的に送ってくれたりとか、ポストカードを送ってくれたりとかしていました。なんか、なんていうんだろう。道しるべを、そういうふうに進めたかったんだと思う。私がそういうのを好きになるように。

プライベート・コレクション | Private Collection J



上 | 無題（奥多摩の秋） | 柳澤大水 | 2012年頃／下 | 雪光 | 呉斉王 | 不明

この部屋はもういろいろに、本当に使って。お恥ずかしいんですけど。外国人の方のお習字教室、それから私のお稽古。私のお稽古は今、1カ月に11日間あります。時間は、自宅では、朝10時からお弁当を持ってきていただいて、4時までをやっています。皆さん、出来上がった作品をプレゼントする、孫にあげるの、娘にあげるの、夫の誕生日にあげるから完成するまでここに置いておいてと言って、見せないで、家に持っていかないで仕上げる方も、中にはいらっしゃいます。広いか狭いか、とにかく雑然としているんですけど、あまりきれいにし過ぎないのが、皆さん落ち着くような感じです。いっぱい飾ってありますね。数にしたら数え切れないほどありますけど。

—

手づくりをもう40年以上やっていまして、いろんな所へ頼まれて行ったり、それから、自分からこういうものが生かせられますよというリメイクなんかもしたり。テレビでも、本当に随分紹介させていただいて。自分の好きなことで、手づくり、そして主人は絵、私の兄も絵を描くことが好きで、今のこの状態に飾っております。

—

そうですね。主人は言うことの…、もう頑固な人でしたから。とにかくバブルの頃に、物で欲しい、そして墨絵は少しやっていたんですけれども、一度この斉王先生にお会いしたときに、なんかこの世界、この先生だと思ったんじゃないでしょうか。もう迷わずしてこれを買って。

—

最初私、持ってきたときは、えーと思ったんですけど、今は本当に大好きな絵の一部。もう私の生活の一部ですね。ここでお稽古をしているときにも、まず眺めてから、それからさあ始めましょうという感じでしています。でも部屋に飾って、他の色との対比で、やっぱり白黒も落ち着くなという感じで、気に入っています。

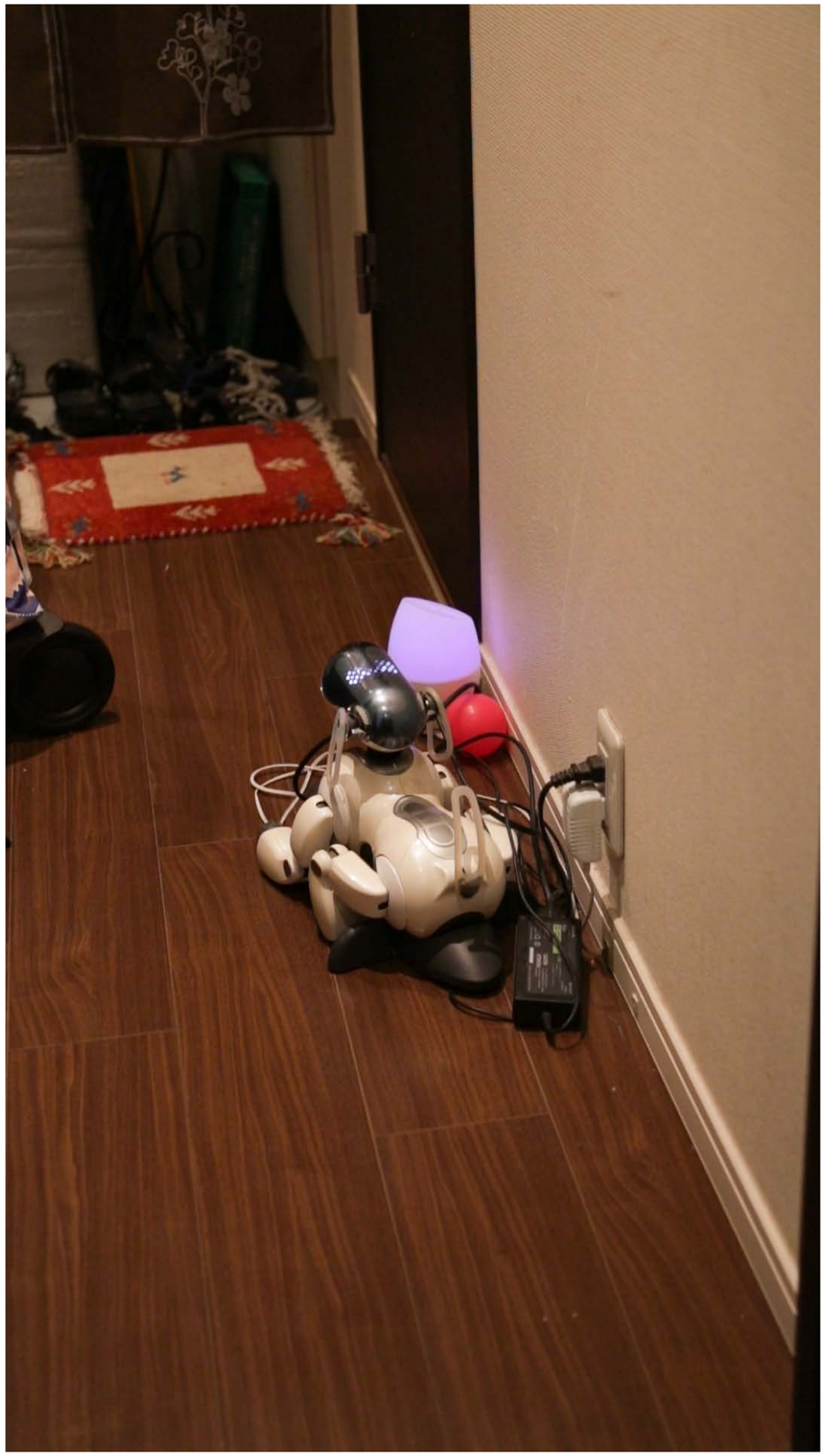
—

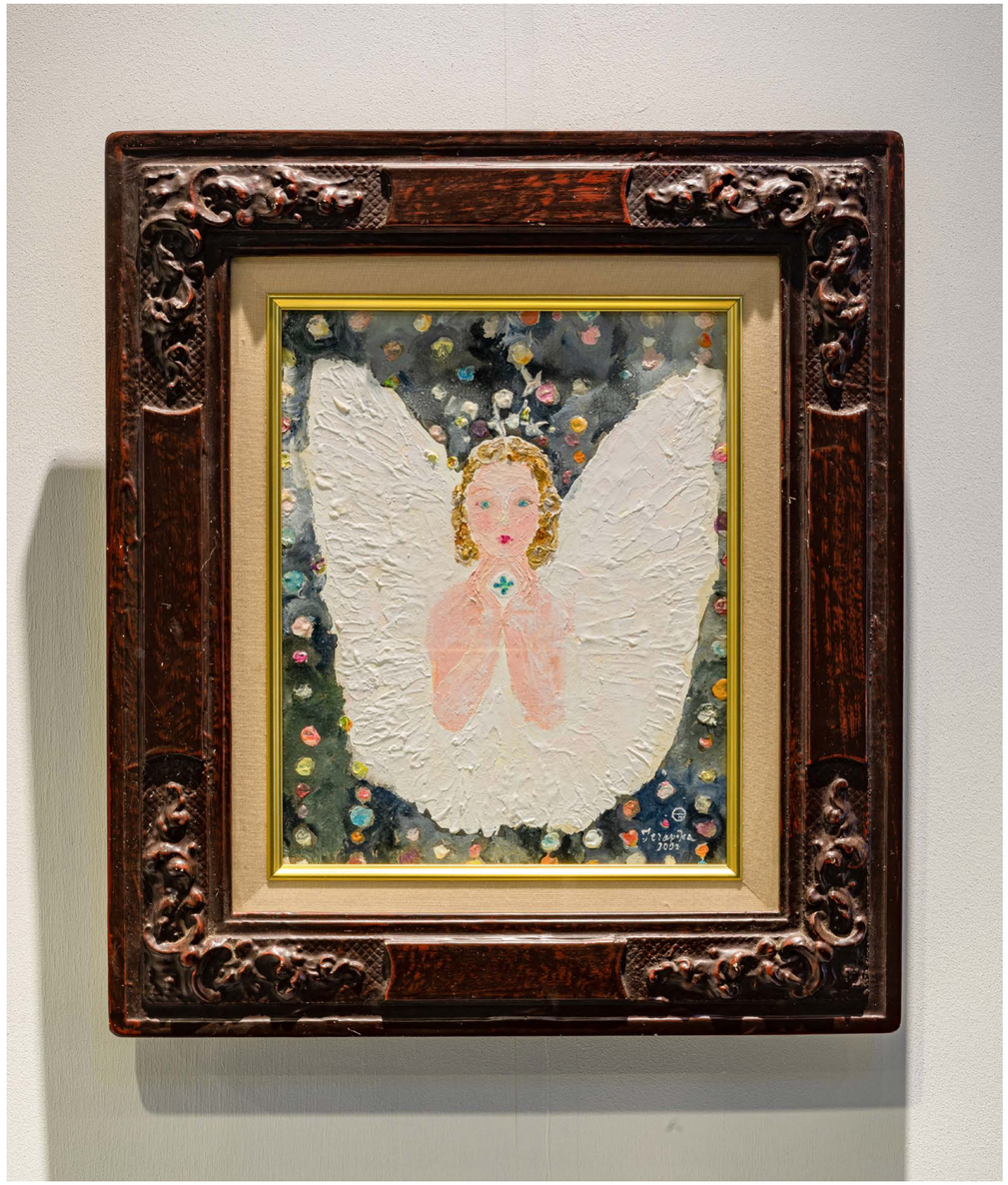
あれは私の兄ですね。兄がもう、亡くなって何年にもなるんですけど、絵が好きで絵が好きで、山が好きで、仕事が終わると絵の道具を持ってワゴン車で、冷蔵庫、小さいのを載っけて、食料を入れて、それで描きに行ってて。もう何十枚描いたかしら。気に入って頂きました。山のシラカバ林ですね。

—

兄は大勢の家族の長男でしたから、時には父親代わりになった後はもう…。もう感謝感激でしたが、一生懸命働いて、そのお金で私たちは学校も行かせてもらえたんだと思います。ですから亡くなる間際に、「今度生まれ変わったら画家になりたいよ、光子」と言ったのを、今でも頭の中に、絵を見るたびに思い出しています。

プライベート・コレクション | Private Collection K





light beads angel (gray)｜寺門孝之｜2002年

私は寺門さんの絵がとても好きで、展覧会があるときに行って、お金に、自分が、余裕があるときには、自分がそのとき、一番気に入った絵を少しずつ買って、コレクションしてきました。それでこの絵は、天使が四つ葉のクローバーを持って光っているように、なんかお祈りをしていますよね。私、これがとても好きで。戦うっていうか、頑張るように、きれいになるように、汚れないようにっていうふうに、私を応援してくれるように私には見えたから、どうしてもこれ、欲しかった。

—

会社員をしながら、小さい子どもがいて、映画監督の夫がいて、自分自身も物書きでっていうので、ややもするとくじけそうになること、いっぱいありました。きちんと仕事をしなければならないとか、いい原稿を書かなければならないとか、なかなかいい母親になれないとか、夫に対してもいろいろ…。自分ができないこと、いっぱいありました。でもこの絵を掛けて、この絵を見て、汚れないようにすがすがしく生きていこう、という気持ちに、いつもなれた。この絵を見ながら、私は毎日、自分のあるべき姿勢を取ってきたという気持ちがあります。私にとってはお守りみたいな絵です。

—

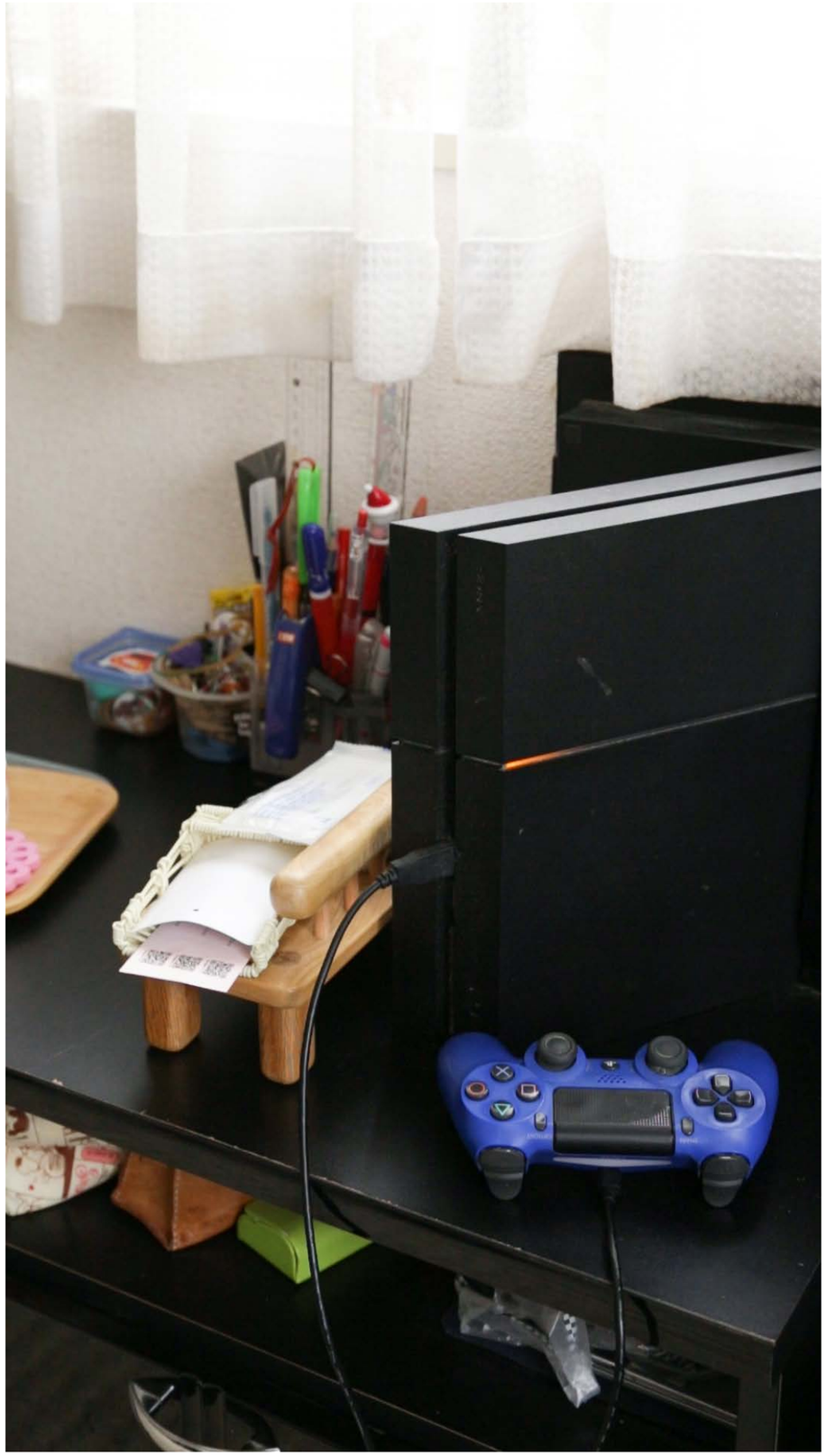
まずここの位置に飾っているというのは、ここはうちの台所です。ここは私が座る位置です。そうすると私がまっすぐ前を見たときに、いつも目に入るように、一番好きな絵を、自分の一番見やすい場所に飾りました。そうすると毎日毎日見ていられますから、私にとってはいいお薬であり、お守りであり、なんかよりどころという感じがしています。

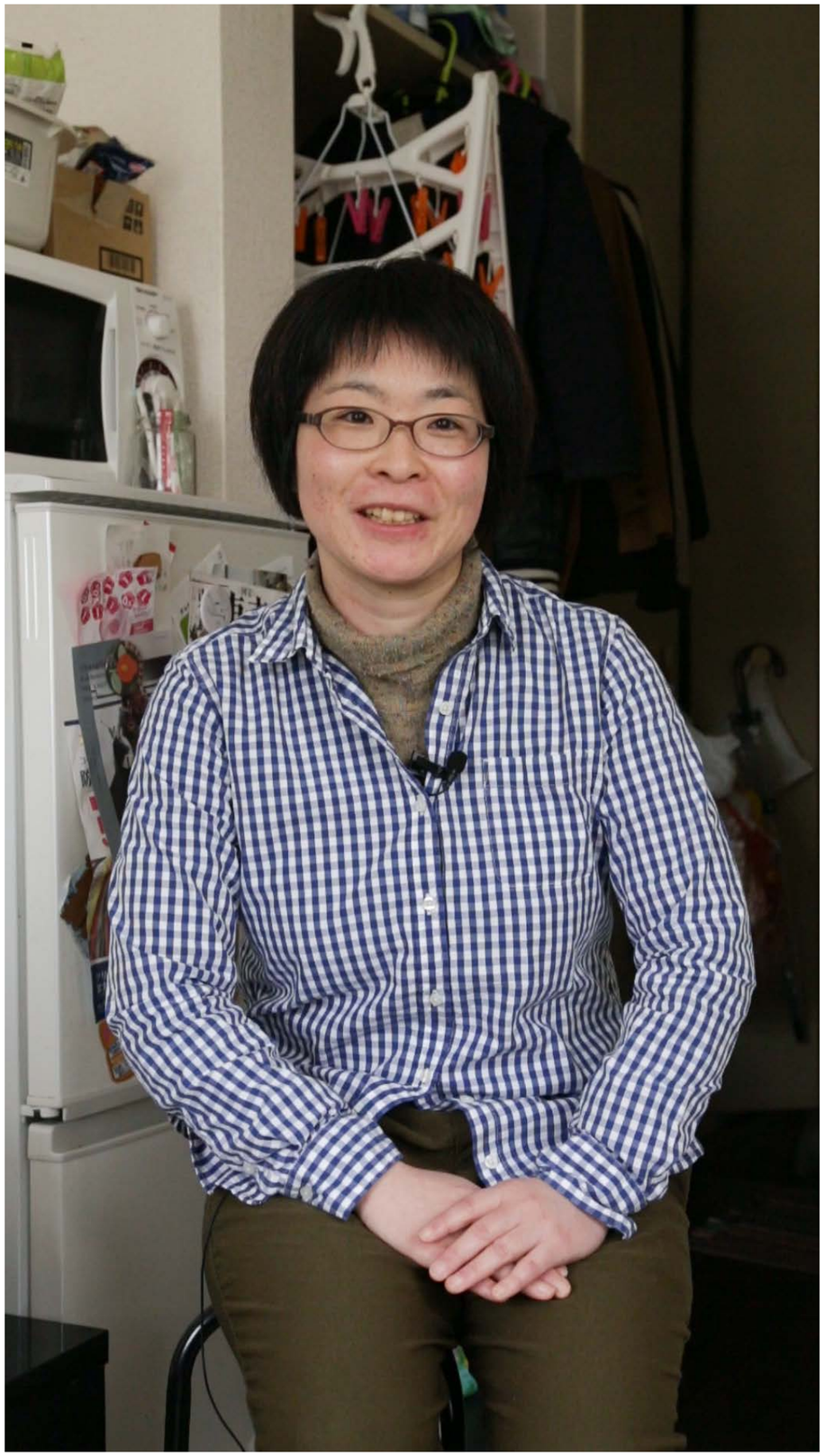
—

だからこれを飾って毎日見ていると、自分が強くなれるような気持ちにもなるし、助けてもらえるような気持ちになる。宗教画ではないけれど、なんか私にとっては心のよりどころという感じがしますね。寺門さんというとてもすてきなアーティストが、こういう素晴らしい絵を描いて、私がそれを持つことができたというのは喜びですね。それを飾っていられるというのも、とても幸せなこと。

—

自分の魂を強くしたり清めたりすることができるでしょ。素晴らしいアートは。私はそう思っているので、私にはそれが必要よ。





無題 | 川村司 | 2017年

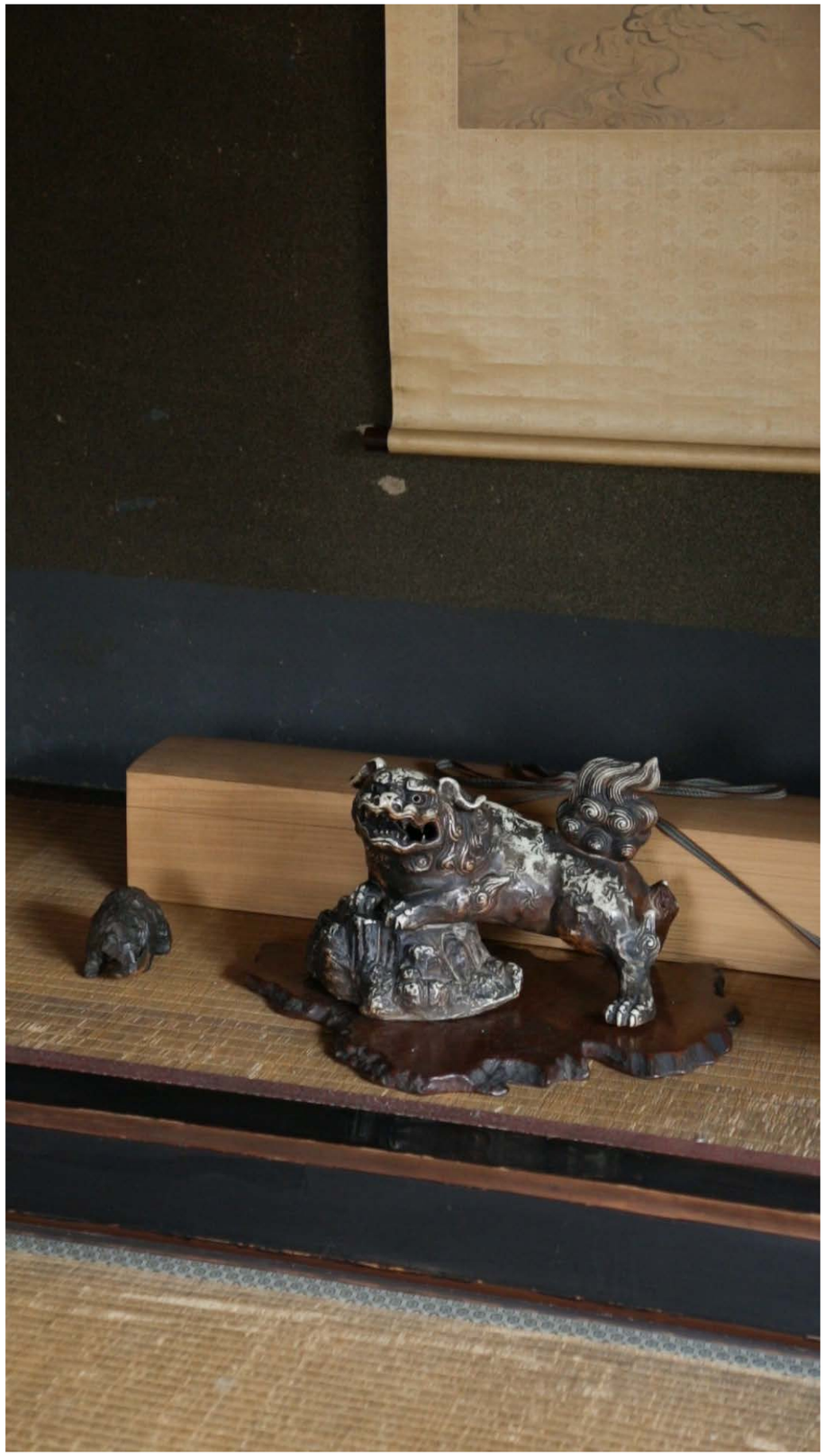
私は写真を撮るの好きで、写真の作品をグループ展に出したりしています。それで川村さんと知り合いになりまして、それで、なんか急にいただけるっていうことでいただきました。すごい朗らかな方で、丁寧に接していると思いますし、その丁寧に接するというのが作品にも表れているんじゃないかなとは思います。川村さんとは、文通ですとか、あとは個展を開催されるので、個展を見に行ったりして、交流を深めています。

—

色のグラデーション、色を塗り重ねていって、色の変化を楽しんでいるんじゃないかなというのは思います。あと結構、底…、奥のほうは結構濃い色を使っているので、濃い、荒々しい感じを、多分下に置いて、上で柔らかなトーンを置いているので、そういうのもトーンで、なんか隠しているのかなみたいなような気はするけれども、ずっと長く見ていても見飽きないというのは、不思議だなというのは毎日思います。

—

飾ってある場所は食事をしたりですとか、書類書いたりですとか、作業場みたいな所です。なぜそこに置いたのかというと、私は賃貸のアパートに住んでいるので、壁に穴が開けられないから、ちょっと身近に置ける所はどこだろうということで、台の上にそのまま置いてしまえと思って、置いて、その絵を見ながら食事をしたりですとかして、気分を安らがせています。



ロビンソン物語 | 花山信吾 | 1957年頃

プライベート・コレクション | Private Collection N

ここは寝室なんですよ。おやじとおふくろが寝ていた部屋で。今は家内が、ちょっと脚が悪いんで、2階へ上がることが少ないんで、ここを空けています。

—

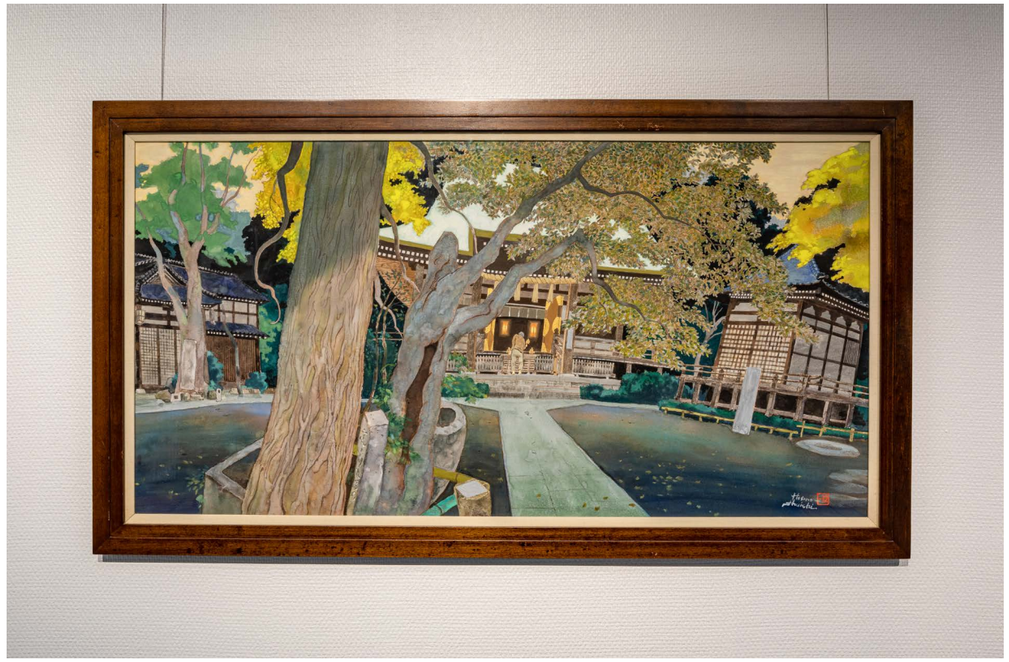
私は昭和34年に高校を出まして、それで当時からもう、出張に行かされまして。おじさんの家に来たんですが、全国の書店を回りました。それで夜学へ、早稲田大学の英文科へ行きながら、行った記憶があります。それで卒業したときに、38年なんですが、引き続き日本書房へ入りまして、その後結婚して、今日に至りました。

—

当時、昭和27年に父が起こした、おじさんが起こした日本書房が…、当時、手伝っていまして。子どもの頃からね。それでそういうものになじんでいましたんですが、当時『ああ無情』とか『ロビンソン物語』は印象が強かったので。映画とか本とか読んで、印象が強かったわけですね。

—

昭和51年に父が亡くなりまして、それで15年か20年ぐらい、引き継いでやったんですが、辞めるときに、私が日本書房を辞めるときに、そういうことは考えていなかったんですが、印刷屋にあるということは、他のことで精いっぱいでわかりませんでしたけど、挨拶に来たときに、お家のほうへ僕が車で引き取りに行ったときに、箱に入れた原画のものを受け取って、そのまま倉庫へ入れていったんですね。それで気が付かなかったんですよ。それで、孫が生まれたときに、ああと思って、子どもの本だからと思って、枠にはめて出したんですね。それでだんだん、自分の思い出、好きなものを飾るようになったんですね。



奥沢神社｜細野修一｜2008年

私は、実はここにあるNPO法人の土とみどりを守る会というのがありまして、そこにいる玉置さんも細野さんも所属していました。そんなことで細野さんのご主人、細野修一さんからは、多分いろんな絵を見せていただいたりというお付き合いがありましたが、何年か前に残念ながら亡くなられまして、奥さまも2丁目のお住まいから、ちょっと外のほうへ引っ越されることに、実はなりまして。実は細野修一さんは、奥澤神社の絵だとか、それから先ほどの、大ケヤキの散歩道の、ケヤキのことを描いておられて、ぜひこちらで公開する場所があったら展示をしてほしいというのが、細野さんの奥さんのご希望だったんです。

—

それで言われて、初めから奥澤神社だとか、町会だとか、まちづくりセンターだとか、なんかいろいろお話をしたんですが、なかなかまとまらなくて。結局私が今、お預かりをして、最低年に1回、奥沢の駅の所に、奥沢文化祭というのが秋に1回ありまして、絵を飾ることができますので、それを、実はチャンスを待っているんですが、まだ実現はしていません。そんなことで、ここで絵を預かっていて、どなたか欲しい方がいたら、そちらに差し上げてもいいんですよね? そんなことで、実は飾ってあります。

—

一つは奥澤神社の境内の絵なんですが、実は私、もう一つ、奥澤神社の前にある商店会の役員をしていまして、あそこの神社を見ると分かると思いますが、大蛇、わらで作った大蛇がありまして、それをみこしにするお祭りに参加しています。そんなことで、奥澤神社には随分、よく行ったりしておりまして、この絵を見せてもらって、ああ、いい絵だなと思っていました。

—

それから、特にあそこで参拝しているおじいちゃんが、奥沢の商店会の、長老のおじいちゃんとすごく格好が似ているので、大変懐かしく思って、いい絵だなと思ってました。

—

やっぱり、誰か欲しいという人が出ると一番いいんだけど。このサイズの絵なんでね、なかなか自分の家に飾るというのは難しいんですよね。どうせ飾るなら、やっぱり奥澤神社であるとか、そういう、もっと大きな、公的な場所で飾って、引き取ってほしいんだけど、今のところちょっと不調に終わっていましてね。隣に寄付するよと言ったら、また別かもしれませんけど。寄付じゃつまらないよね。売らなくちゃ、ね?

—

(いや、でももう、預かってもらって、皆さんの目に触れる所に置ければ、それでももういいかなと思います、今は。)

—

そうですか。まあちょっといずれ、後になった、機会があったら、隣にちょっと聞いてみますけど。ここもいい場所なんだよね。そういう意味じゃ。大蛇の奥澤神社からまっすぐの場所。こちら側の道、大蛇通りというんですよ。ここから緑丘に行く途中までがね、奥沢大蛇通りという。これはちゃんと公的な、区が名前を登録した道になっています。だからここに置くのが一番いいですよね。

日米のクリエイターをつないだ57年前の手紙｜L.A. 在住のクリエイター｜1962年

プライベート·コレクション｜Private Collection P

そもそも、僕はフジタの絵手紙が好きだったんですね。乳白色の裸婦像とかっていうのも、もちろんあれですけれども、フジタが婦人宛てに絵手紙を送ったことがあって、その絵手紙が非常に個人的に好きで、なにかそれを彷彿させるようなものがあって、気になって買ったという次第です。その後、買ってからちょっと気が付いたんですが、宛先が日本デザインセンターの山城隆一というふうになっていて。もともと僕が日本デザインセンターという会社にちょっとだけ勤務していたこともありまして、なにかそういう、ちょっと運命的なものを感じたというのもあった。

—

その後、山城隆一さんという人を、ちょっと僕はその時点では知らなかったんですが、いろいろ調べてみたら、日本デザインセンターの創設メンバーの一人でもあったということで、面白い、縁かなというものをちょっと感じた次第です。

—

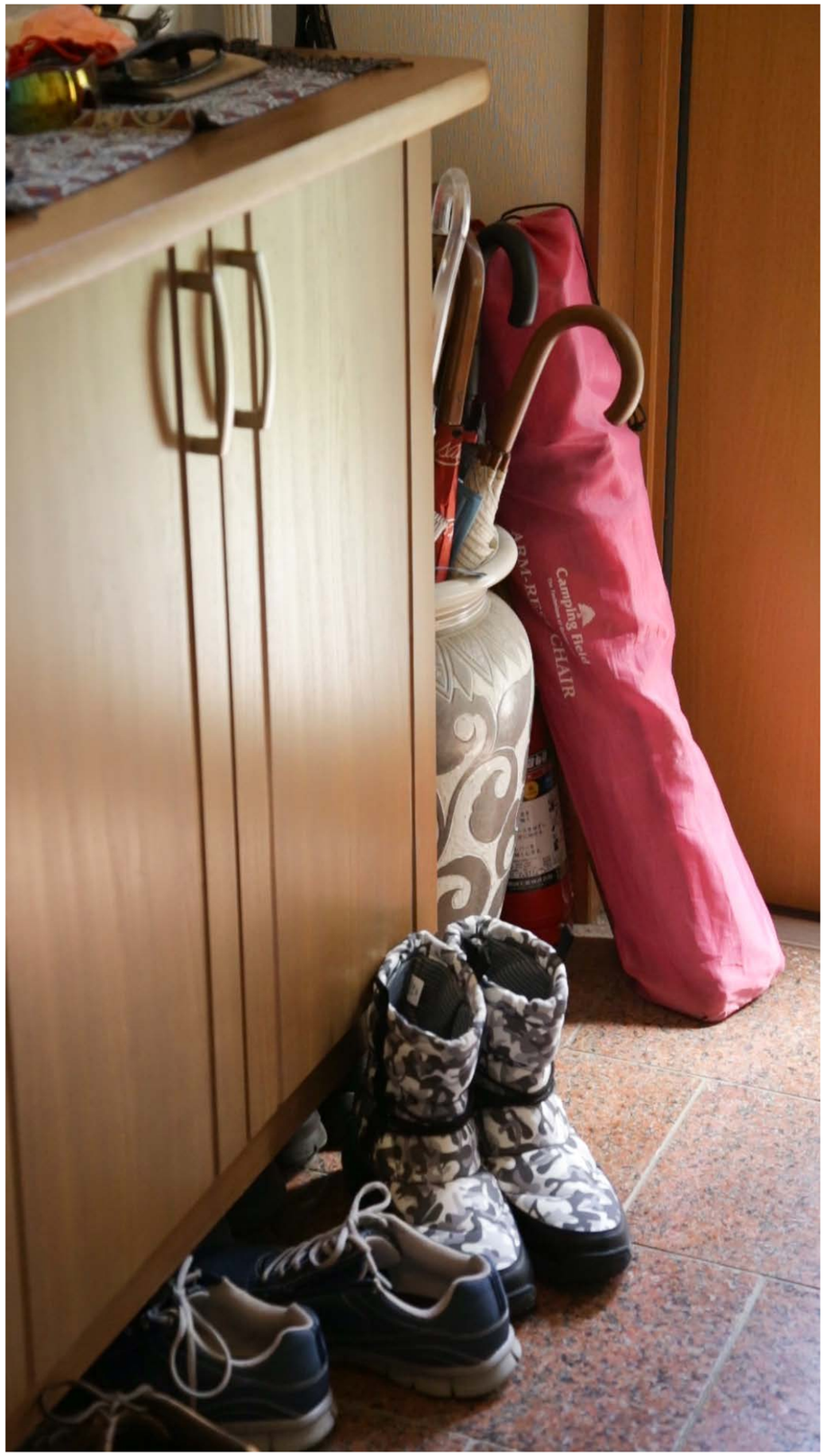
差し出しの年月日を見ると、1962年にロサンゼルスのサンセットブルーバードから出されている消印があるんですけれども、おそらくロサンゼルスのアートディレクターなのか、イラストレーターなのかわかりませんけれども、山城隆一氏の友人が山城氏のために送ってくれたものだというふうに推測するんですけれども、ご覧のとおり、木のイラストが描かれていまして、その木のイラストは、左の隅にある切手をモチーフにして、それを描いているんですけれども、なんとなくそういったところにユーモラスなところが感じられるのと、おそらく、よほど仲がいい関係じゃなければこういう手紙は送ってこないと思うので、1962年の当時に、ロサンゼルスと東京でそういった、おそらく同業と思われる2人なんですが、よほど親しい関係にあったのかなというふうに感じます。

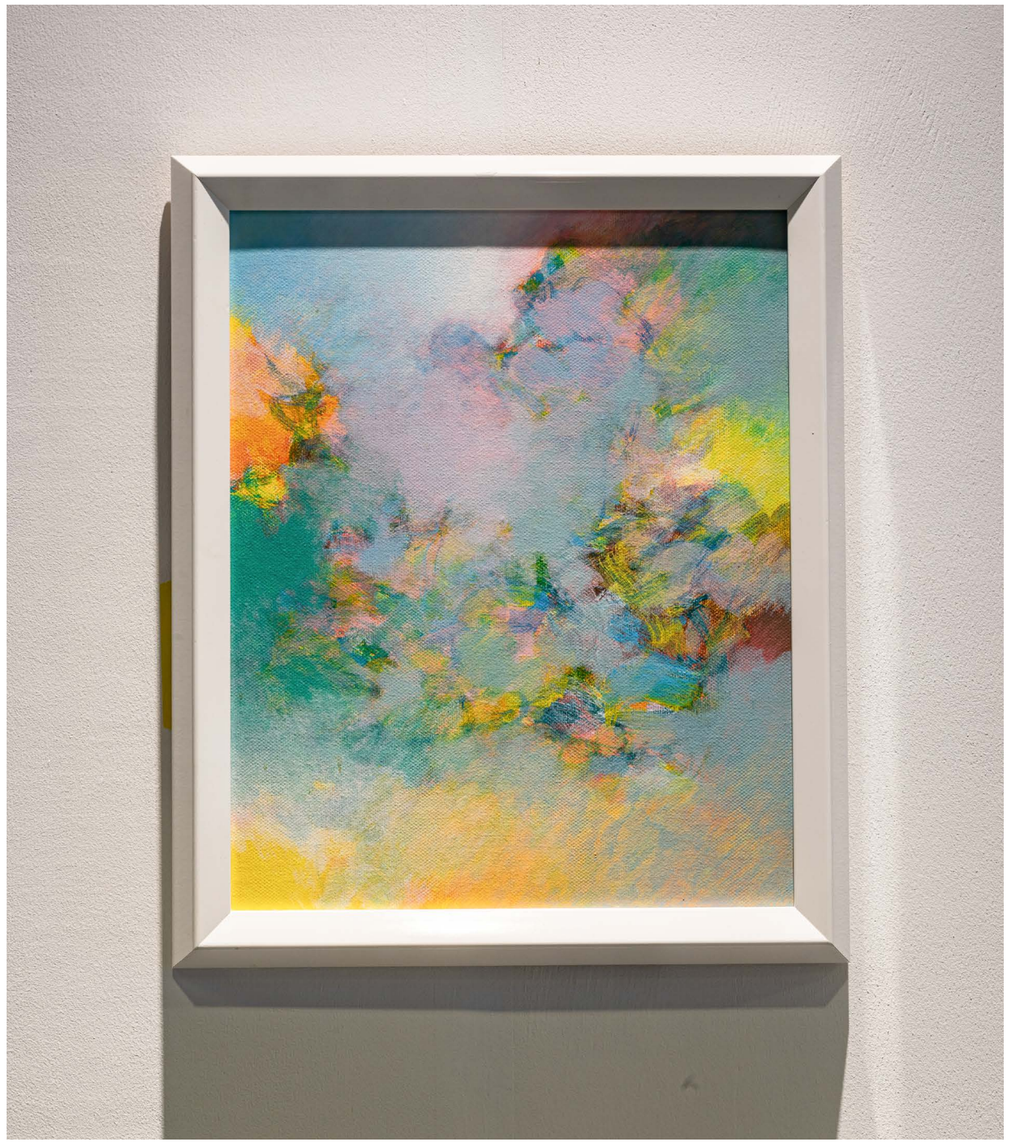
—

それから僕が購入した際には、既にフレームに収められていたんですが、非常にいいフレームに収まってまして。おそらく山城氏が自宅で大切に飾っていたんじゃないかなということが、うかがい知れるというところでしょうか。

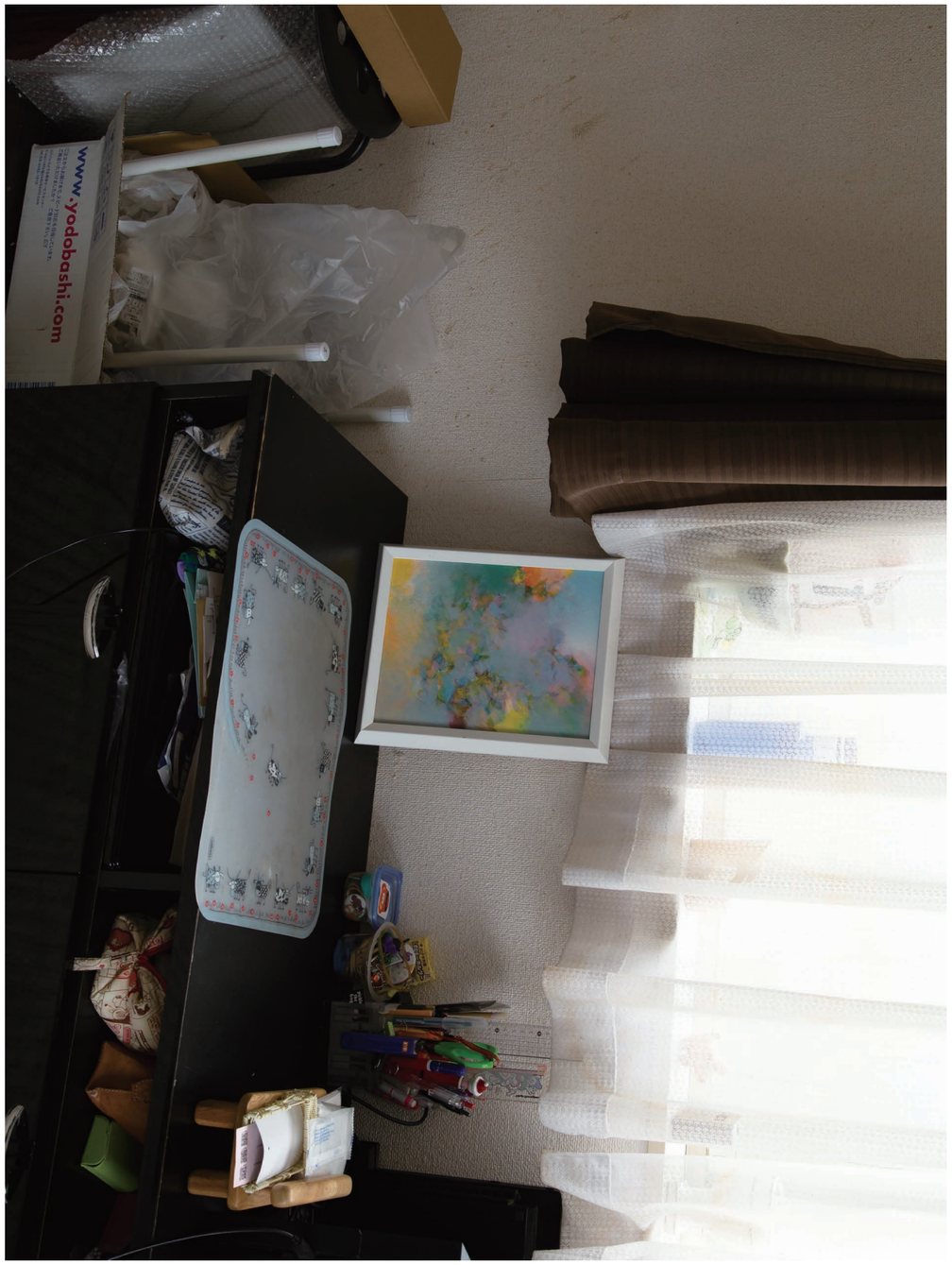
—

ストーリーを感じられるものということですかね。単純にデザインがいいとかっていうよりも、なにかメッセージ性だったり、ストーリーを感じられるものだと、自分の気持ちには引っ掛かってくるものが多いですけれども。この手紙も、見たときにいろいろとちょっと、考えさせられるものがあったので、見てすぐ買いたいなというふうに思ったんですが。


Camping Field
ARM-RE CHAIR



不明 | 森雄太 | 2010年



孫の作品です。孫が小学校４年生のときに描いた絵です。実はこれ、世田谷区の世田谷美術館のこども美術大学で講座を受けて、出来上がったものです。

—

私のはやっぱり、小学校4年生という時期に、子どもが素晴らしいことを、多分するだろうという、そういう意識があるもんですからね。せっかくだからなんかやってくれないかなということで誘って、受講したんですけどね。受講というより、参加したというかね。情報はないですので、こういうのがあるからどうということで、遊びに来るのをきっかけに連れていったということですね。だから本人は、半分は私に付き合いながら、もともと絵が好きとかそういうことはないですから、一緒にやるっていうことで行ってくれたんだと思うんですよね。あんまり、実はできて、きれいに装丁したから、「あなた、持っていきなさい」って私、言ったんですけど、「僕、いいよ。ここに飾っておいて」って、そう言って置いていってくれました。まだ渡していないです。だから徐々に分かってきて、大きく成長するとね、人間ってこう、みんなが喜んでくれるとか、褒めてくれるとか、そういうのが分かってきて、少し意識はあるかもしれないですけどね。

—

なんでしょうね。写実でもない。何ていうの。あの子の気持ちが、多分入っているなという気はするんですけどね、その当時の。わかりませんけど。でも、私は気に入っています。

プライベート・コレクション｜Private Collection　Q

無題（能登の山桜）｜勝田深氷｜2010年頃

もう亡くなって8年たちますから、そのちょっと前ですか。もう10年近くですね。9年ぐらい前の絵ですね。

—

絵に出てきているんですよね。彼の人生の中のいろんなことが。だからこの絵なんか、もろに出ているんですよ。暗い絵というのは、やっぱり自分が、心の乱れというか、いろんなことで悩んでいるときとそうでないときに、絵というのがやっぱり、絵を見ていくと変わり目が分かるんですよね。サンフランシスコ描いた絵なんていうのは、すごいパステル画ですけどね、お見せできないのが残念ですけどね、明るい、やっぱりサンフランシスコだなという、そういう感じの絵を描かれますしね。

—

おしゃれも彼から教わったんです。「おまえね、そんな若いのに黒っぽいのばっかりして、おまえ、青春なんだからもっと明るいものを着れ」と言って。あだ名が、だから私、ジミー山口になっちゃったんですよ。それから、彼からおしゃれを学んで、それで挙げ句の果て、VAN JACKETという洋服の会社に入って、それで企画の仕事を、おしゃれの仕事を始めて、それで下北沢でメンズショップをやった。そういういきさつ。彼もそれに賛成してくれた。

—

深氷さんも、だからそういう意味では、釣りもゴルフをやらなかったですよね。ただ、やったのはスケート。彼は自分がモヤモヤしているときに、やっぱりスケートっていうのは気持ちいいですからね。氷の上で。やっぱり絵を描くというんですか。スケートでも今は、ほら、フリーとかショートとかあるけど、昔はコンパルソリーといって、図形を描くんですよ。8の字を描いたり、8の字を三つ重ねたり。それをいろんな形でやる。図形を描くといえば、絵に通じるところがあるんじゃないかなと思うんですよね。

—

ただ彼、太っていたから、ジャンプは跳べてなかった。私は60キロなかったんですよ。スケートをやっているときは、もう。余分な肉、つけないようにしてやっていたからね。でも彼は器用でした。だからね、絵も器用。器用というのかな。才能もある上に器用でしょ。料理でも何でも、彼はね、和食でも洋食でも、そういうの、すぐ会得して、自分の料理に。お茶碗までうるさかったですよ。奥さん、気の毒なぐらい。このあれにはこの器、これにはこの器。

プライベート・コレクション展｜Private Collection

—

2019年6月15日［土］—7月15日［月祝］｜9:00-21:00

月曜休み［祝日はのぞく］｜入場無料［関連イベントのみ一部有料］

生活工房ギャラリー［三軒茶屋・キャロットタワー3階］

—

［主催］公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

［企画制作］藤井龍／［協力］諧林招

［後援］世田谷区、世田谷区教育委員会

—

［アートディレクション・デザイン］Tanuki

［会場設計・設営］ARAKAWA.

—

—

［関連イベント1—プライベート・ミュージアム・ツアー］

集合日時：6月29日［土］13:30

（15:30頃に千歳船橋駅にて解散予定）

集合場所：千歳船橋駅北口

定員：8名（抽選）

参加費：500円（お茶代込）

—

［関連イベント2—カタログ・メイキング］

日時：7月14日［日］14:00-17:00

場所：ワークショップルームA（生活工房4階）

講師：Tanuki（本展デザイン担当）

対象：中学生以上

定員：20名（申込先着順、5月25日10時より受付開始）

—

［関連イベント3—クロージング・トーク］

日時：7月15日［月祝］14:00-15:00

場所：生活工房ギャラリー

講師：藤井龍（本展企画制作）

定員：20名（申込不要、直接会場へ）

参加費：無料

プライベート・コレクション｜Private Collection［カタログ］

—

［写真］藤井龍

［会場写真］松尾宇人

［デザイン］Tanuki

［編集／発行］公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー

Tel: 03-5432-1543

E-mail: info@setagaya-ldc.net

Web: http://www.setagaya-ldc.net/

—

—

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。

©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2019

—

—

世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center